

源義経年表

西暦	できごと	エピソード
1159年	源義経が源義朝の九男として生まれる。 平治の乱が起き、義朝が敗れる。	
1160年	義経（牛若）は、母の常盤とともに各地を平氏の追っ手から逃れて旅をした後、平清盛のもとに出頭する。 母親の違う兄の頼朝は、捕らえられた後。伊豆（静岡県）に流される。	
1167年	平清盛が太政大臣になる。	
1169年	このころ、義経は鞍馬寺（京都）にあずけられ、遮那王と名づけられる。	鞍馬天狗
1174年	義経が鞍馬寺を出て、平泉（岩手県）の藤原秀衡のもとへ行く。	中尊寺金色堂
1180年	木曾義仲が信濃で、源頼朝が伊豆から平氏を討つため兵を挙げる。 義経が、平泉から頼朝のもとにかけつけ対面する。	
1181年	平清盛が死ぬ。	
1183年	木曾義仲が京都に入り人々に乱暴をはたらく。	
1184年	義経は初陣で木曾義仲をやぶる。 義経が一ノ谷で平氏をやぶる。 義経が頼朝の許可なく後白河法皇より判官の役職を授かり、頼朝は激怒する。	鶴越の逆落とし 判官びいき
1185年	義経が屋島（香川県）で平氏をやぶる。 義経が壇ノ浦（山口県）で平氏を滅ぼす。 義経の行動について梶原景時が頼朝にクレームを入れる。 頼朝は、人々に義経に従わないよう命じる。 義経は鎌倉に向かい頼朝に弁明しようとするが、鎌倉に入ることをさえ断られる。 叔父行家が義経に接近し頼朝への謀反を企てる。それに対し頼朝は義経追討を決意する。 義経は京都を脱出し逃亡生活に入る。	那須与一 義経の八艘飛び
1187年	義経は、各地を逃げまわった後、北陸を経て、平泉の藤原秀衡のもとへ行く。 藤原秀衡が死ぬ。	勧進帳
1189年	藤原秀衡の子、泰衡が裏切りにあい、義経は衣川（平泉の近く）で自害する。 頼朝が藤原泰衡を討ち奥州を平定する。	弁慶の立ち往生 夏草や兵どもが夢の跡
1192年	頼朝が征夷大將軍となり鎌倉に幕府を開く。	いい国つくろう鎌倉幕府

チャート式人物相関図（源氏）

本人	父	母	配偶者・恋仲	子	家来・関連人物
源頼朝 (中井貴一)	源義朝 【義朝の弟】 源義賢 源行家 (大杉蓮) 【義朝の親戚】 源頼政 (丹波哲朗)	熱田神宮大宮司 藤原季範の娘	妻・北条政子 (財前直美) 【政子の父】 北条時政 (小林稔侍) 【政子の兄】 北条宗時 (姫野恵二) 愛妾・亀の前 (松嶋尚美)		【家来】 梶原景時 (中尾彬) 安達盛長 (草見潤平) 【その他】 比企尼 (二木てるみ) 三善康信 (五代高之)
源範頼 (石原良純)		遠江国 池田宿の遊女			
源義経 (滝沢秀明)		常盤御前 (稲森いずみ) 【再婚相手】 一条長成 (蛭子能収)	妻・良子 (尾野真千子) 恋仲・静御前 (石原さとみ) 【静の母】 磯禪師 (床嶋佳子)		【家来】 武蔵防弁慶 (松平健) 伊勢三郎 (南原清隆) 駿河次郎 (うじきつよし) 佐藤継信 (宮内敦士) 佐藤忠信 (海東健) 喜三太 (伊藤敦史) 鷲尾三郎 (長谷川朝晴) 【その他】 鬼一法眼 (美輪明宏) 覚日律師 (塩見三省) 千鳥 (中島知子) うつぼ (上戸彩) 大日坊春慶 (荒川良々) お徳 (白石加世子) 五足 (北村有り起哉) 朱雀の翁 (梅津栄) 烏丸 (高橋耕二郎)
木曾義仲 (小澤征悦)	源義賢 (義朝の弟)		愛妾・巴御前 (小池栄子)		

チャート式人物相関図（平氏）

本人	父	母	配偶者・恋仲	子	家来・関連人物
平重盛 (勝村正信)	平清盛 (渡哲也) 【清盛の義母】 池禅尼宗子 (南風洋子) 【清盛の家来】 平盛国 (平野忠彦) 【清盛の異母弟】 平頼盛 (三浦浩一)	右近将監 高階基章の娘	後妻・経子 (森口瑤子)	平維盛 (賀集利樹) 平資盛 (小泉孝太郎)	
平宗盛 (鶴見辰吾)		時子 (松坂慶子)			
平知盛 (阿部寛)		【時子の弟】 平時忠 (大橋吾郎)	妻・明子 (夏川結衣)		
平重衡 (細川茂樹)		【時忠の後妻】 領子 (かとうかずこ)	妻・輔子 (戸田菜穂)		
徳子 (中越典子)		【時子の侍女】 手古奈 (上原美佐)	高倉天皇	安徳天皇	
能子 (後藤真希)		常盤御前 (稲森いずみ)			

チャート式人物相関図（藤原氏・皇族・他）

本人	父	母	配偶者・恋仲	子	家来・関連人物
藤原泰衡 (渡辺いっけい)	藤原秀衡 (高橋英樹)				
藤原國衡 (長嶋一茂)					
藤原忠衡 (ユキリョウイチ)					
後白河法皇 (平幹二郎)	鳥羽天皇		寵姫・丹後局 (夏木マリ)	二条天皇 以仁王 (岡幸二郎)	鼓判官・平知康 (草刈正雄)
金売り吉次 (市川左團次)			恋仲・あかね (萬田久子)		

キャスティング：あ行（1 / 1）

<p>あかね 金売り吉次の女。もとは借上という金融業。吉次と知り合ってから、吉次の京での仕事も手伝っている。吉次が不在の時は何人もの雇い人を動かす女傑。</p>	<p>萬田久子（まんだ・ひさこ） 女優。1978年ミス・ユニバース日本代表。デビューはNHK「なっちゃんの写真館」だがヒロインではない。</p>
<p>明子（あきらけいこ） 平知盛の妻。安徳天皇の弟・守貞親王の乳母。常に気丈で明るく、時子に一番頼りにされている。平家一門が西国に流れ窮地に陥った時、時子からある重大な「計画」を持ちかけられ、実行する。壇ノ浦で生き残り、徳子と守貞親王を守って大原に隠棲する。</p>	<p>夏川結衣（なつかわ・ゆい） 女優。サッポロビール「冬物語」のCMに出演し注目される。「愛という名のもとに」にも出演していたらしいが記憶にない。</p>
<p>池禅尼宗子（いけのぜんに・むねこ） 清盛の義母で、彼も頭が上がない存在。平治の乱後捕えられた頼朝の姿形が、自分の死んだ長男に似ていると言い出し、清盛に助命を嘆願する。</p>	<p>南風洋子（みなみかぜ・ようこ） 女優。一瞬南田洋子に見えてしまうが、宝塚歌劇団出身のベテラン女優さん。</p>
<p>安達盛長（あだち・もりなが） 頼朝の伊豆配流時代からの側近。</p>	<p>草見潤平（くさみ・じゅんぺい） 俳優。大河ドラマの常連で「徳川家康」「真田太平記」「独眼竜正宗」「翔ぶが如く」「元禄燎乱」などに出演。</p>
<p>伊勢三郎（いせ・さぶろう） 源義経の家来。伊勢の生まれ。父はかつて源氏の家来だったというが、今や盗賊熊坂長範の徒党に落ちぶれていた。美濃青墓で、奥州に下る義経一行を襲撃。義経に一命を助けられたことを機に、家来として仕えようと決意する。口八丁の彼の弁舌と交渉術がたびたび一行の窮地を救う。</p>	<p>南原清隆（なんばら・きよたか） お笑いタレント。ウッチャンナンチャンのナンチャン。お笑いスター誕生、夢で逢えたら等の番組をきっかけにブレイク。</p>
<p>磯禅師（いそのぜんじ） 静御前の母で、自らも白拍子であった。義経と静の関係をかげで優しく支える。</p>	<p>床嶋佳子（とこしま・けいこ） 女優。TBSの昼のドラマ「ママは女医さん」に主演。</p>
<p>一条長成（いちじょう・ながなり） 京・一条に住む貴族で、官職は大蔵卿（おおくらきょう）。清盛のもとを去ることになった常盤が牛若を連れて嫁いだ「三人目の夫」。</p>	<p>蛭子能収（えびす・よしかず） 漫画家。本業以上にテレビでの活躍が目立つ。最近映画監督もこなす。漫画は正直面白くないが絵は個性的。無類のギャンブル好き。</p>
<p>うつば 幼い頃両親を亡くし鞍馬の里の農家の夫婦の養女になった。義経が鞍馬寺に入れられた頃に出会う。自分を遊女に売り飛ばすような酷い兄がいるが、その兄が義経を襲ったことを知って、うつばは心から兄を憎み義経への忠誠を誓う。その想いはやがて恋心になるが、それは終生報われることはなかった。それでもうつばは義経につかず離れず、最期まで見届けることになる。</p>	<p>上戸彩（うえと・あや） 国民的アイドル。ドラマ、映画、CM、歌番組とこの年にしてマルチにこなす。これまで大河ドラマに興味なかった若い女性をタッキーが、若い男性を上戸彩が引きつける。（熟年層は、マツケンと松坂慶子が担当）</p>
<p>お徳（おとく） 京七条で、鎧武具に使う組紐などを商う老女。政変や夜盗、火事や飢饉や、魑魅魍魎が跋扈する都でしたたかに生きている。武具の商いから知れる武家の動向、そして昔面倒を見ていた孤児たちからの噂話。徳に集まる情報は多岐に渡る。清盛の幼い頃を知るほどで、清盛にもずけずけとものを言える関係である。</p>	<p>白石加代子（しらいし・かよこ） 女優。今回の義経は、彼女の目線によるナレーションで語られる。</p>

キャスティング：か行（1 / 2）

<p>覚日律師（かくにちりっし） 鞍馬寺の僧。平家によって仏門に入れられた幼い牛若の精神面を育てることになる師。牛若はやがては寺に留まらず源氏の復興を担う者と感じつつ、鞍馬に送られてきた牛若少年を厳しく、時に優しく指導する。</p>	<p>塩見三省（しおみ・さんせい） 俳優。つかこうへい作品を中心に数多くの舞台で活躍。また、数々のTV、映画に出演。</p>
<p>梶原景時（かじわらの・かげとき） 石橋山の戦いでは平家方だったが源頼朝を救い、以降巧みな弁舌で頼朝に重用される。屋島攻撃の際に義経と作戦上の問題で対立。頼朝への梶原の「讒言」が義経失脚の一因を作ったといわれるが、律儀な軍監である彼にとっては、義経の戦法は理解できなかったのかも知れない。</p>	<p>中尾彬（なかお・あきら） 俳優。最近すっかりバラエティじみてしまったが、今回のキャスティングは、ベストマッチ。</p>
<p>金売り吉次（かねうり・きちじ） 奥州平泉の砂金商人。藤原氏の領地の砂金や鉱石、特産品を売買することで藤原氏の財力確保の一端を担う。奥州にとどまらず京、奈良、西国と各地にその人脈は広い。清盛の福原遷都の動きに平家が交易を独占するのではと危機を感じ、対平家抑止力を求めて源氏に接近する。吉次が目をつけたのは鞍馬山に送られた義経であった。</p>	<p>市川左團次（いしかわ・さだんじ） 歌舞伎役者。四代目市川左團次。実は1966年の大河ドラマ「源義経」にも出演している。</p>
<p>亀の前（かめのまえ） 伊豆・蛭ヶ小島の農家の娘で、政子と結婚する前からの頼朝の愛妾。頼朝の身の上にも、ましてや政にも一切頓着しない女。そんな彼女の性格が頼朝には何よりの「癒やし」となっていたが、その存在に気づいた政子の猛烈な嫉妬のもと、頼朝との仲を悲しく引き裂かれる。</p>	<p>松嶋尚美（まつしま・なおみ） お笑いタレント。オセロ。相方は千鳥役の松嶋。中島同様、これでもかというくらい毎日テレビに出演する売れっ子。</p>
<p>烏丸（からすまる） 京の町の孤児で、お徳に育てられ、今ではお徳や朱雀の翁を手伝っている。感情を滅多に表に出さないのが五足とは対照的。</p>	<p>高橋耕次郎（たかはし・こうじろう） 俳優。文学座に所属。活動も舞台中心。</p>
<p>河越太郎の娘・良子 （かわごえたろうのむすめ・ながこ） 義経のもとに、兄・頼朝から送りつけられた「正妻」。実は監視的な役目を帯びていたが、やがて義経の人柄に本当に魅かれていく。</p>	<p>尾野真千子（おのまちこ） 女優。映画など中心に活躍。かローリーメイトのCMにも出演。</p>
<p>鬼一法眼（きいちほうげん） 陰陽師（おんみょうじ）。鞍馬寺に入った義経（＝遮那王／しゃなおう）に武術をさずける。</p>	<p>美輪明宏（みわあきひろ） 歌手。最近の話題は「ハウルの動く城」で荒地の魔女の声優。</p>
<p>喜三太（きさんた） 京の孤児。幼い頃から孤児仲間と小さな悪行を重ねながら生き延びてきた。平家のために人を討つという話に乗せられて、誰とは知らずに義経を襲う。結果は義経一人に惨敗。しかし痛手を負った自分にかけてくれた義経の優しさに改心。最初の家来として同行を許され、馬の口取りとなる。</p>	<p>伊藤淳史（いとう・あつし） 俳優。元仮面ノリダーの相棒チビノリダー。カローリーメイトのCMでもおなじみ。</p>

キャスティング：か行（2 / 2）

<p>木曾義仲（きそ・よしなか） 通称木曾冠者。以仁王の令旨に応じて挙兵し、倶利伽羅峠の戦いで平家の大軍を破って入京を果たす。しかし義仲軍の洛中での乱暴狼藉には公家や町民の不満がつのり、朝廷と対立。征夷大將軍となり自ら朝日將軍と称したが義経らの大軍に攻められ、その首を京の町に晒された。</p>	<p>小澤征悦（おざわ・ゆきよし） 俳優。小澤征爾の息子。NHK朝の連続ドラマ小説「さくら」で有名になる。</p>
<p>建礼門院徳子（けんれいもんいん・とくこ） 平清盛の次女。高倉天皇の中宮として安徳天皇を産み「国母」となる。帝の死により「建礼門院」の院号を宣下された。源氏の上洛に安徳帝を伴って一門とともに都を落ち、壇ノ浦で安徳帝とともに入水したが、彼女だけ助けられて京に送られる。まもなく出家し、大原寂光院で余生を送った。</p>	<p>中越典子（なかごし・のりこ） 女優。NHK朝の連続ドラマ小説「こころ」のヒロイン。その前はキムタクのHEROなどでちょい役として出演していた。</p>
<p>後白河法皇（ごしらかわ・ほうおう） 鳥羽天皇の第四皇子。皇位継承順位は低かったのだが、激しい継承争いのなか幸運にも即位。まもなく長子・二条天皇に譲位し院政を開始。以降三十年以上、衰勢はありながらもその死まで朝廷政治の中心にあり続けた。平家・源氏という武家の台頭の中、自らは武力を持たない朝廷として、いかに生き延びるかということに智略の全てを注ぎ込んだ。ある時は清盛に、また義仲・義経に、そして頼朝に接近しては切り捨てる。すべては後白河の掌の中のゲームの持ち駒であるかのようだ。一方で信仰に厚く、遊びごとを好み、今様（当時の流行歌）を集成して「梁塵秘抄」を編纂したほか、朝儀の復興にもつとめ「年中行事絵巻」を作らせた。</p>	<p>平幹二朗（ひら・みきじろう） 俳優。過去、大河ドラマは「国盗り物語」、「樫の木は残った」と2回も主人公を演じている。</p>
<p>五足（ごたり） 京の孤児。お徳に拾われ、働き口の世話を受ける。洛中を動き回っていたせいで、おのずと情報収集能力も備えた。また耳がよく、囁く声も聞き逃さず、口の動きだけで何を言っているか読むことも出来る。耳が弱り、またあまりに民の声が届かなくなった清盛を心配したお徳は、五足を「耳役」として清盛に差し出す。清盛の死後まもなく、彼の遺志を遂行する途中で命を落とす。</p>	<p>北村有起哉（きたむら・ゆきや） 俳優。父は文学座の北村和夫。舞台を中心に活躍する。</p>

キャスティング：さ行（1 / 1）

<p>佐藤忠信（さとう・ただのぶ） 藤原秀衡の臣下。もとは義経たちの平泉滞在中の監視的役目だったが、頼朝の挙兵に呼応して義経が平泉を離れる際、兄・継信とともに従う。歌舞伎「義経千本桜」の狐忠信のモデルにもなっている。このドラマでも、義経の愛妾静御前を守って壮絶な最期を遂げる。</p>	<p>海東健（かいとうけん） 俳優。NHK朝の連続ドラマ小説「ほんまもん」などに出演。</p>
<p>佐藤継信（さとう・つぐのぶ） 藤原秀衡の臣下だったが、弟・忠信（つぐのぶ）とともに義経に従う。屋島の戦いで義経をかばって死んだとされる。</p>	<p>宮内敦士（みやうちあつし） 俳優。映画「MUSASHI」の主役に2000人のオーディションから選ばれ、悠然と若き武蔵を演じ好評を博す。100m11秒の俊足を持つ。</p>
<p>静御前（しずかごぜん） 源義経が生涯愛した女性。生業は白拍子。母・磯禅師も白拍子。都で一度義経の窮地を救った静は、富士川の合戦に巻き込まれて傷ついたところを義経と劇的に再会。義経に愛され、二人は行動を共にするが、静の存在は鎌倉の頼朝・政子には疎まれた。壇ノ浦の後、義経追討の院宣が出ると義経の都落ちに従うものの、生き別れて吉野の山中で捕らえられる。翌年、鎌倉に護送され尋問を受ける。この時静の腹には義経の子が宿っていた。生まれる子が男子なら殺す約束で出産。しかし生まれた赤子は男子で、約束どおり海に投げ捨てられたという。その後、頼朝に強要されて鶴岡八幡宮で歌舞を披露。義経への思いを素直に唄ったため、頼朝を激怒させるが、却って政子はその潔さに同調する。失意のうちに京に戻り、そこで義経の死を知る。</p>	<p>石原さとみ（いしはら・さとみ） 女優。NHK朝の連続ドラマ小説「てるてる家族」ヒロイン冬子役。誰もが広末涼子であろうと予想していた中での人選だった。義経のキャストは2004年5月の発表予定だったが、育児休業中の広末に最後まで固執したため、静役の発表のみ2カ月以上も延びた。静役発表の日、静になりきり舞を披露した石原は「（舞いは）おととい習ったばかり」とこぼすなど舞台裏はドタバタだった。</p>
<p>輔子（すけこ） 平重衡の妻。安徳天皇の乳母。おっとりした性格の女房だが、一の谷で夫が捕えられてからは不安な日々を送る。壇ノ浦で生き残り都に戻ったのち、奈良へ護送される重衡とつかの間の悲しい再会を果たす。夫の処刑後はその身柄を引き取って供養したという。</p>	<p>戸田菜穂（とだ・なお） 女優。NHK朝の連続ドラマ小説「ええによぼ」のヒロイン。ショムニにも出演。「ええによぼ」の彼女を見たときは、山口智子、竹内結子レベルまで売れると思ったのに、、、。</p>
<p>朱雀の翁（すざくのおきな） 普段は好々爺然として、お徳や烏丸の押す押し車に乗っている。その実体は京を牛耳る闇の世界のボス。</p>	<p>梅津栄（うめづ・さかえ） 俳優。具体的な作品は説明しにくいだが、おじいさん役でよく見かける。</p>
<p>駿河次郎（するがの・じろう） 源義経の家来。もとは船乗り。奥州行きの道程を海路に取らざるを得なくなった義経一行。伊勢三郎が船を借りたいとやって来たのが次郎との出会いだった。奥州までの船旅の中で義経という男に魅力を感じ始め、平泉到着後も帰らずに一向と行動を共にすることになる。</p>	<p>うじき・つよし タレント。元こどもバンド。最近はタレント、サンデープロジェクトなどの司会として活躍。</p>

キャスティング：た行（１／４）

<p>大日坊春慶（だいにちぼう・しゅんけい） うつぼの兄。幼くして両親を亡くし仏門に入れられたが、今や破戒僧。平家に雇われて、仲間の喜三太たちとともに義経を襲う。</p>	<p>荒川良々（あらかわ・よしよし） 俳優。ドラマ・CMで幅広く活躍。どう見ても上戸彩の兄貴とは思えない。</p>
<p>平清盛（たいらの・きよもり） 平忠盛の嫡男だが、実父を白河上皇とする説もある。六波羅殿・六波羅入道とも称する。1156年保元の乱では後白河天皇方として一族を率いて活躍し、その功により播磨守となる。1159年平治の乱で源義朝（義経の父）を破り、確固とした地位を獲得。乱の後、平家一門の官位は急速に上昇する。1160年武士としてはじめて参議となり、1167年には従一位太政大臣。翌年出家、摂津国福原に引退したのちも、平家政権の中核として権力を掌握し続けた。娘・徳子を高倉天皇の中宮とするなど、摂関家をはじめ朝廷内の有力貴族との婚姻政策を進めた。1177年には反平家勢力による鹿ヶ谷の陰謀が発覚する一方、1179年に後白河法皇を幽閉し、院政を停止した。翌1180年、外孫の安徳天皇（徳子の子）を即位させて独裁政権を樹立したが、以仁王が挙兵したことに衝撃を受け、福原遷都を強行。以仁王（もちひとおう）の令旨を得た源頼朝ら反平家勢力が挙兵する中病死した。「傲慢な独裁者」と思われやすい従来の清盛のイメージ。それだけでなく、「ロマンあふれる早すぎた改革者」という一面も描いていくのが今回の「義経」。清盛の有り余る夢は一種のロマンだが、それを一人追い求め過ぎて周りは置き去りにされがちだ。日宋貿易をもって国を豊かにしようという、貿易立国をも意図した福原への遷都も清盛の改革の一つだったが、思いだけが走りすぎて根回しを怠り朝廷や仏徒などの反感を買った。息子たちの中に彼ほどの人物がいなかったという、後継者に恵まれなかったのも清盛の悲劇だ。また清盛は常に、白河院のご落胤ではないかという心の屈託、親の縁に薄い寂しさを胸に抱えていた。その心の揺れが、父・義朝を失った義経・頼朝兄弟の命を救うことになった。そして幼い義経は母・常盤とともに清盛と一時を過ごし、奇しくも清盛からロマンの遺伝子を誰よりも強く引き継いだのである。</p>	<p>渡哲也（わたり・てつや） 俳優。現石原プロダクション社長。今回はライフルを使えないので残念。大河ドラマ「勝海舟」で主役、「秀吉」で織田信長を演じた。</p>
<p>平維盛（たいらの・これもり） 平重盛の嫡男。踊りの名手で、後白河法皇五十歳祝の宴では舞楽「青海波」を舞う。富士川の戦いで総大将となったが、水鳥の飛び立つ音に驚いた兵が混乱し戦わずに敗走。平家都落ちに従ったがその後一門から離れ、世をはかなんで入水する。</p>	<p>賀集利樹（かしゅう・としき） 俳優。まじめな役やヒーローの役を中心に演じる若手イケメン俳優。NHK教育テレビの「ミニ英会話・とっさのひとこと」では、得意かどうかは別にして英語を披露。</p>

キャスティング：た行（2 / 4）

<p>平重衡（たいらの・しげひら） 平清盛の五男。南都興福寺・東大寺を焼き討ちした人物として知られる。一の谷の戦いに敗れ捕虜となって鎌倉に送られたが、潔い態度で頼朝とも対等に渡り合った。その後奈良で処刑された。義経とは歳も近く、今回のドラマでは幼少時代の義経との交流も描かれる。</p>	<p>細川茂樹（ほそかわ・しげき） 俳優。モデル出身だけあったかっこいい役が多いが、トーク番組ではコミカルな一面もみせる。</p>
<p>平重盛（たいらの・しげもり） 平清盛の嫡男で、宗盛・知盛らは異母弟になる。平家軍政の中心的役割を果たした人物。父・清盛を諫めることのできるただ一人の息子として父の信頼も厚かったが、早逝する。</p>	<p>勝村政信（かつむら・まさのぶ） 俳優。「天才たけしの元気ができるテレビ」に出演していたのはもはや伝説。映画・ドラマ・舞台と幅広く活躍。</p>
<p>平資盛（たいらの・すけもり） 平重盛の次男。摂関家の藤原基房の行列の前を横切って舎人に路上で恥辱を受け、これに怒った父重盛が基房に報復した「乗合事件」の発端を作った。</p>	<p>小泉孝太郎（こいずみ・こうたろう） 俳優？ご存じ小泉首相の息子。パパが首相でなくなったときに勝負。</p>
<p>平時忠（たいらの・ときただ） 時子の弟。「平家にあらざんば人にあらざ」と言ったのはこの人。様々な政略を仕掛け何度か流罪の憂き目に遭うが、清盛の台頭と妹・滋子（建春門院）が後白河法皇に寵愛されたことで異例の出世もした。壇ノ浦にも生き残り、助命のために義経に娘を差し出したといわれる。</p>	<p>大橋吾郎（おおはし・ごろう） 俳優。時代劇を中心に数え切れないほど多くの作品に出演している。</p>
<p>平知盛（たいらの・とももり） 平清盛の四男。勇猛果敢な武将として能「船弁慶」などの芸能にも取り上げられている。源氏軍入洛の際には都落ちを主張し再軍備を図った。壇ノ浦の戦いで敗れ「見るべきものはすべて見た」と潔く入水する。</p>	<p>阿部寛（あべ・ひろし） 俳優。某大学理工学部卒で私の先輩。「なんでまた理工なの？」などとよく言っていた。在学中からメンズノンノのモデルとして活動を開始している。もちろん当時からデカイ。</p>
<p>平宗盛（たいらの・むねもり） 平清盛の三男。異母兄重盛・父清盛の死後は一門を統率したが、兄ほどの力はなかった。壇ノ浦では死にきれずに捕えられ鎌倉に護送される。今回のドラマでは、自分だけは後白河法皇のご落胤ではないかと思ひ込み、武芸よりも雅を愛す人物として描かれる。</p>	<p>鶴見辰吾（つるみ・しんご） 俳優。映画・ドラマ・舞台と幅広く活躍。「高校聖夫婦」がなつかしい。</p>
<p>平盛国（たいらの・もりくに） 平清盛の家人（けにん）。先代・忠盛からの家人であり、長老的存在。</p>	<p>平野忠彦（ひらの・ただひこ） 声楽家。デビュー以来、「フィガロの結婚」などオペラ歌手として活躍する隠れた超大物。</p>
<p>平頼盛（たいらの・よりもり） 平清盛の異母弟で、母は池禅尼。母が頼朝の助命に一役買ったことから、平家没落後は都落ちに従わず鎌倉に招かれた。その背信がやがて彼をさいなむ。</p>	<p>三浦浩一（みうら・こういち） 俳優。映画・ドラマなど数多くの作品に出演。</p>
<p>丹後局（たんごのつぼね） 後白河法皇の寵姫。夫・平業房は後白河の近臣だったが、清盛による院政停止の際に解官・処刑された。夫の死後法皇の傍に上がる。以後法皇に適切な助言や示唆を与え、朝廷の地位を支え続けた。後白河が唯一弱音を吐ける相手でもある。</p>	<p>夏木マリ（なつき・まり） 女優。お芝居はもちろん、千と千尋では声優（湯婆場）、W杯予選日本対シンガポール戦では国歌を斉唱するなどの才能も発揮。</p>

キャスティング：た行（3 / 4）

<p>千鳥（ちどり） 鎌倉の漁師の娘。海で溺れかけた弁慶を助けた。潮にまみれ日に灼けてまるで女っ気のない自分を「女」として見てくれた弁慶に好意を持ち、何かにつけて世話を焼く。女の扱いを知らない弁慶とのやりとりは義経主従の格好の興味の的となる。</p>	<p>中島知子（なかじま・ともこ） お笑いタレント。オセロ。相方は亀の前役の松嶋。テレビ局の怠慢で新しいタレントを探さないのか、あるいは匹敵するタレントがいないのか、とにかく、これでもかというくらい毎日テレビに出演する売れっ子。</p>
<p>鼓判官・平知康 （つづみぼうがん・たいらの・ともやす） 白河法皇の側近。鼓の名人であったことから「鼓判官」と呼ばれた。</p>	<p>草刈正雄（くさかり・まさお） 俳優。田村正和、岡田真澄とならび、キザな台詞を言っても違和感がない貴重な俳優。</p>
<p>経子（つねこ） 平重盛の後妻で、高倉帝の乳母。同じ後妻同士ということもあり時子の信頼も厚い。日頃は冷静沈着だが、なさぬ仲の維盛が敗戦の際に手放してしまった平家嫡流伝来の鎧を奪回するため奔走する。</p>	<p>森口瑠子（もりぐち・ようこ） 女優。もっと売れてもいいような美人女優。ドラマ、映画、舞台を中心に幅広く活動する。</p>
<p>手古奈（てこな） もとは北条政子の侍女だったが、頼朝に接近され鎌倉を出奔。時子の侍女となる。</p>	<p>上原美佐（うえはら・みさ） 女優。NHK月曜ドラマシリーズ「オーダーメイド～幸せ色の紳士服店」で主演を演じる。</p>
<p>時子（ときこ） 清盛の妻。六波羅二位・八条二位・二位尼と称す。宗盛・知盛・重衡および高倉天皇の中宮となった徳子を産んだ。時忠は弟、建春門院滋子は妹である。1180年准后、翌1181年には従二位となり、平家一門の中でも影響力をもった。母親との縁の薄い清盛にとってはある意味母のような存在であり、また清盛の夢の一番の理解者でもある。清盛が外で為した子まで面倒をみたという懐の広い女だが、こと義経の母・常盤との関係だけは決して許せなかった。清盛の死後は夫の遺志を継いで気丈にも一族を率いた。1183年平家の都落ちに従って西国へ下り、1185年壇ノ浦の戦で「波の下にも都がございます」と、外孫である安徳天皇と三種の神器を抱き入水。</p>	<p>松坂慶子（まつざか・けいこ） 女優。その美貌はかつて世の男性のあこがれの的だった。30年前だったら、おそらく常盤として役を演じたでしょう。</p>

キャスティング：た行（４／４）

<p>常盤御前（ときわごぜん） 義経の生母。もとは九条女院の雑仕女。「平治物語」によれば、雑仕女の採用にあたり都じゅうから千人の美女を集めた中でも一番の美女であったという。源義朝の愛妾となり、今若・乙若・牛若（源義経）を産む。平治の乱で義朝が敗北したあと、母と三児の助命を請いに六波羅に出頭。その後平清盛の愛妾となり、廊御方能子（ろうのおんかたよしこ）を産んだ。夫を討った敵将の愛妾に甘んじたことを、幼い義経は理解できなかつたに違いない。しかし常盤は、母や子供たちの助命と引き換えに清盛に身をゆだねた訳ではない。清盛は情のある人物だった。この人になら自分も、子供たちの未来も託せる。そう感じた。母と子供たち三人を抱えて放り出されたら、どうやって生きるか、その術もない常盤であった。打算ではなく、常盤は女として母として清盛を受け、流れのままに身を置いたのである。</p>	<p>稲森いずみ（いなもり・いずみ） 女優。数々のドラマをこなし、もはやベテラン女優の仲間入り。常盤は２２歳で義経を生んだことになっているので、１０年ほど若返る必要があるが、、、。</p>
<p>巴御前（ともえごぜん） 義仲の従者で愛妾。容貌にすぐれ武芸に優れた伝説の女性で、いわば「和製ジャンヌダルク」。自分の姪にあたる義仲の正妻の産んだ子・義高を手元で育て、我が子のように慈しんだ。義仲の死後は、その後を追って果てたとも鎌倉方の家人に嫁いだとも諸説あるが、今回は意外な形で...</p>	<p>小池栄子（こいけ・えいこ） タレント。イエローキャブのエース。グラビア・ドラマ・バラエティなど幅広く活躍する。巴御前のイメージにもあっている。</p>

キャスティング：は行（1 / 1）

<p>比企尼（ひきのあま） 頼朝の乳母。頼朝が伊豆に流される際、自らも東に下り、以降彼の身の回りを支え続けた。</p>	<p>二木てるみ（にき・てるみ） 女優。日活時代から活躍する大ベテラン。黒澤明の「赤ひげ」で好演し史上最年少でブルーリボン助演女優賞を受賞。</p>
<p>藤原國衡（ふじわらの・くにひら） 秀衡の庶長子。西木戸太郎と称す。秀衡は國衡とその異母弟泰衡に、源義経を主君と仰ぐよう遺言したが、泰衡による義経謀殺を傍観したという。</p>	<p>長嶋一茂（ながしま・かずしげ） タレント。父は長嶋茂雄。一時期何だかんだ言われたが、本人は以外と努力家で幅広く活躍している。</p>
<p>藤原忠衡（ふじわらの・ただひら） 秀衡の末子。義経を最初敵視していたが、歳が近いこともありやがて同調する。</p>	<p>ユキリョウイチ ミュージシャン。海外の伝統音楽なども積極的に取り入れる。</p>
<p>藤原秀衡（ふじわらの・ひでひら） 奥州藤原氏三代目の当主。平泉を拠点として陸奥・出羽諸国に強力な支配を展開した。それはいわば独立国家とさえ言えるほどで、源平争乱の際も双方からの誘いにも動かなかった。若き義経を保護し、彼の青年期の人格形成を支えた「第三の父親」。義経追討令が出たのちも義経をかくまったが、秀衡の死により義経も奥州藤原氏も滅びていく。</p>	<p>高橋英樹（たかはし・ひでき） 俳優。源氏は暴れん坊将軍、平氏は大門軍団、そして藤原氏は桃太郎侍が支える。</p>
<p>藤原泰衡（ふじわらの・やすひら） 秀衡の次男で、奥州藤原氏四代当主。義経が平泉に来た当初は敵視していたが、ある時義経に命を救われ、以来心を許しあえる関係となる。しかし父の死後、兄弟ともに義経を守れという父の遺言と、義経を差し出せという頼朝の命令との狭間で大いに揺れる。</p>	<p>渡辺いっけい（わたなべ・いっけい） 俳優。NHK朝の連続ドラマ小説「ひらり」で石田ひかりがあこがれた竜太先生役を演じブレイク。</p>
<p>北条時政（ほうじょう・ときまさ） 北条氏はもともと平家方で、時政は伊豆に送られた頼朝の監視役であった。京都在勤の間に娘政子が頼朝と夫婦になったことは「寝耳に水」。しかし頼朝の将来性に賭けた時政は彼の拳兵に協力し、やがては鎌倉幕府の屋台骨を支える存在となる。</p>	<p>小林稔侍（こばやし・ねんじ） 俳優。昔は仁義なき戦いなど極道映画のチンピラ役もしていたが、映画「夜汽車」で日本アカデミー賞優秀助演男優賞を受賞するなど、円熟した演技をみせる大物俳優。</p>
<p>北条政子（ほうじょう・まさこ） 源頼朝の妻。母親を早く亡くし坂東武者の中で育ったせいか、男勝りの真直ぐな性格。伊豆流刑中の頼朝に出会い恋に落ちる。頼朝が政治家として成長していく過程で政子自身も成長し、陰で巧みに夫の成功をリード。人を惹きつける義経の魅力に早くから気づき警戒した彼女は、徐々に頼朝・義経兄弟の間の溝を深めていく。</p>	<p>財前直見（ざいぜん・なおみ） 女優。もともとキャンペーンガールとしてデビューしたが、今ではバンバン主役をはる大女優。</p>
<p>北条宗時（ほうじょう・むねとき） 政子の兄だが、若くしてこの世を去る。</p>	<p>姫野恵二（ひめの・けいじ） 俳優。舞台を中心に活躍。</p>

キャスティング：ま行（1 / 2）

<p>源範頼（みなもとの・のりより） 義朝の六男。通称蒲冠者。異母兄頼朝の挙兵に呼応し、源氏軍の大將を務める。異母弟義経のような奇襲奇策の能力はなかったが、実は彼の連勝を陰でサポートしていた人物。</p>	<p>石原良純（いしはら・よしずみ） 俳優。父は石原慎太郎都知事。「まんてん」で気象予報士を演じた大杉漣の方がなぜか説得力がある。</p>
<p>源行家（みなもとの・ゆきいえ） 義朝の末弟。源頼政の挙兵の際、以仁王の令旨を諸国の源氏のもとに伝える。しかし頼朝とは相容れず、義仲と結んで上洛した。その後義仲とも対立し、頼朝・義経兄弟の不仲が表面化すると義経側に加担。あちこちにくっついては掻き回し続けた男は、潜伏先の和泉で非業の死を遂げる。</p>	<p>大杉漣（おおすぎ・れん） 俳優。洪い役からちょっとコミカルな役までこなす演技派。NHK朝の連続ドラマ小説「まんてん」では、伝説の気象予報士を演じる。</p>
<p>源義経（みなもとの・よしつね） 源義朝の末子で母は常盤御前。幼名は牛若。平治の乱で父を失い、母は平清盛に身を委ねて乳飲み児の牛若ら息子達の助命を請うた。父と慕った清盛が実は父の敵だと知ったのは、仏門に入るべく送られた鞍馬寺でのこと。やがて平家の目を避け奥州平泉の藤原秀衡のもとで青年期を過ごし、異母兄頼朝が挙兵するとその軍に加わって兄範頼とともに東国武士を率いて上洛、木曾義仲や平氏一門を追討。当時の合戦の作法を度外視した戦法によって連戦連勝した。しかし頼朝の許可なく官位を受けたために頼朝と不仲になり、一転悲劇のヒーローとなってゆく。</p>	<p>滝沢秀明（たきざわ・ひであき） 歌手。ジャニーズ事務所。タッキー、滝沢君などとも呼ばれる。タッキー&翼として歌手活動中。タッキー&翼の「翼」の部分がわからないお父さんは、「うたばん」、「HeyHeyHey」、「Mステ」などでチェック！</p>
<p>源頼朝（みなもとの・よりとも） 鎌倉幕府初代将軍となる、義経の異母兄。平治の乱後平家に捕らえられ、伊豆に流罪となった。その監視役だった北条時政の娘・政子を妻にする。以仁王の平家討伐の令旨に応じる形で挙兵、石橋山の合戦で敗れたがのちに勢力を回復し、鎌倉を本拠とする南関東軍事政権を確立していく。武家の組織を統率するためには肉親をも切り捨てる冷静さの陰で、今回のドラマでは弟義経や妻・娘ら家族との関係に頭を悩ませる人間的な部分も描かれる。</p>	<p>中井貴一（なかい・きいち） 俳優。父は故佐田啓二、姉は中井貴恵。「ビルマの豎琴」や「ふぞろいの林檎たち」でブレイク。昭和63年には大河ドラマ「武田信玄」の主演を演じる。ミキプルーンのCMにも出演。</p>
<p>源頼政（みなもとの・よりまさ） 保元の乱でははじめ源義朝にくみしたが、のちに離反して平清盛方についた。清盛の厚い信頼もあったが、目に余る平家の横暴に以仁王を奉じて反平家の兵を挙げるも、宇治で敗死する。時に齢七十を超えていた。弓の名手、歌人としても有名。</p>	<p>丹波哲郎（たんば・てつろう） 俳優。Gメン75や007に出演したことは有名。時代劇としては、司馬遼太郎の「暗殺」などに出演。この映画で主役の清河八郎を演じた丹波哲郎は超ニヒルでかっこよかった。</p>
<p>三善康信（みよし・やすのぶ） 頼朝の乳母の甥にあたる。京から月に三度頼朝に手紙を送り、都の情報を伝え続けた。やがて鎌倉に招かれ幕府の重臣となる。</p>	<p>五代高之（ごだい・たかゆき） 俳優。石原裕次郎にスカウトされ「西部警察」でデビュー。</p>
<p>武蔵坊弁慶（むさしぼう・べんけい） 源義経の家来。もとは比叡山の僧。寺を追われてのち京に入って刀狩をしていたが、義経に清水観音境内（のちに五条大橋として伝説化）で敗れて家来となる。平家追討や奥州逃避行に従い各所で知略・怪力によって主君を助け、衣川の合戦での殉死は「立ち往生」として有名。</p>	<p>松平健（まつだいら・けん） 俳優。暴れん坊将軍など、テレビや舞台で活躍。元大地真央の夫。最近マツケンサンバばかり話題になるが、今回は本来の演技力に注目。</p>

キャストイング：ま行（ 2 / 2 ）

<p>領子（むねこ） 平時忠の後妻。理知的だが主張が強すぎて、時に周囲との軋轢を生むことも多い。反面お役目には忠実な人。引き取った能子は所詮源氏の子、と何かにつけて辛くあたる。都落ち後は特に猜疑心を強くし能子を常に警戒、能子を炭小屋に閉じ込めたこともある。</p>	<p>かとうかずこ（そのまんま・かずこ） 俳優。そのまんま東との結婚は当時、七不思議といわれた。</p>
<p>以仁王（もちひとおう） 後白河法皇の第二皇子。源頼政とともに反・平家の兵を挙げるが敗死。しかし彼の発した平家追討の令旨（りょうじ）が全国の源氏を動かすことになる。</p>	<p>岡幸二郎（おか・こうじろう） 俳優。ミュージカルなどの舞台を中心に活躍。</p>

キャストイング：やらわ行（ 1 / 1 ）

<p>能子（よしこ） 義経の母・常盤御前と平清盛の間に生まれた娘で、義経にとっては妹。幼くして時忠・領子夫妻に引き取られ、領子付きの女房となる。源氏の血を引く者と見られがちだが、都落ちの際にはあくまで清盛の娘として毅然と平家一門に従う。やがて義経と再会し、壇ノ浦で生き残る秘策を託される。</p>	<p>後藤真希（ごとう・まき） 歌手。元モーニング娘。アイドルの宿命なので仕方がないがモー娘加入直後がピークだった。最近では、NHKの番組によく出演している。</p>
<p>鷲尾三郎（わしお・さぶろう） 一の谷の合戦の際、義経一行に鶴越え（ひよどりごえ）のルートを案内した地元の猟師。以降義経主従に加わる。</p>	<p>長谷川朝晴（はせがわ・ともはる） コントグループ「ジョビジョバ」のメンバー。ライブを中心に活動していたが、2002年12月から一時活動を休止し、現在はソロ活動を行なっている。</p>